

居場所論：総集篇

～なぜ居場所を考えるのか＋日本の文化空間における居場所としての炬燵・縁側等々～

天 沼 香

1. 序論（その1）、あるいは居場所とは何か

居場所……。なんでもないような言葉だけれども、少々、気になる言葉ではある。生硬な感じもしなくはない言葉ではあるけれども、日常的、一般的にごく普通に用いられる言葉でもある。

居場所……。なにげない言葉でありながら、時にちょっと意味ありげな、神秘的な感じすら漂わせる言葉でもある。

居場所……。割合、よく耳にする言葉ではあるけれども、では、その語の定義がきちんと為されているかといえそうとは言えない。というよりも、その語を用いる人が、それぞれの認識、都合、思惑等々により、かなり恣意的に使っている言葉と言えよう。⁽¹⁾

居場所……。この言葉を人文・社会諸科学が正面に据えて学問的に捉えようとした試みを、私は寡聞にして知らない。それは、あるいはこの語自体がかなり融通無碍に無限定的に使用されることが多い言葉であるだけに学問的に厳密に規定して考察することが難しいという事情のせいかもしれない。⁽²⁾

居場所……。この日本語の単語を諸外国語に翻訳しようにも、しっかりと一言で表現できる単語（訳語）は見出せない。英語なら、どこか違うという違和感を抱きつつ、プレイス (place) という単語に、適宜、カンファタブル (comfortable) 等の形容詞を冠したり、the place of my own と表現するなど、状況に応じて単語を連ねて意識して置換するくらいが関の山である。フランス語、ドイツ語、スペイン語等々でも事情は大同小異だ。

すなわち、西欧諸語において居場所という日本語のニュアンスを的確に一言で示す語彙は存在しないと言うことができよう。これは、西洋的な「自我」と関わってくる問題かもしれない。

では、近隣諸語には居場所という語彙はあるのだろうか。

中国語なら、例えば日本語の文章「私の居場所がない」は、平たく直訳すれば「我没处持」「没有我持的地方」「没有我的座位」ということになる。「彼の居場所がわからない」「あの人の居場所が分からない」なら、「他住处

不明」と直訳はできる。また「あの人の去向 分からない」とすれば、「去向」が「居場所」に当たることになるだろうか。しかし、これらは、単純に「いどころ」「住所」「座る場所」等を示すものであり、日本語の居場所という陰翳に富んだ言葉で表現される世界とは異なると言わざるをえない。

朝鮮語には、「場」「いどころ」を示す「곳」(単体では「ゴッ」と発音)という語彙がある。しかし、この「ゴッ」は英語のプレイス (place) に直訳できる類の単語ではあるけれども、けっして日本語の「居場所」のニュアンスにぴったり当て嵌まる単語ではない。

すなわち、近隣諸国で使用されている言語のなかにも、日本語の「居場所」に直訳できる語彙はないのである。

西欧諸語にも近隣諸語にも日本語の「居場所」という単語に該当する語彙がないとするなら、これは日本語独自の語彙、日本特有の文化と関連の深い語彙と言わざるを得まい。

では、この日本語独自の言葉を日本語の辞書はどのように解説しているのだろうか。

居場所……。日本語の辞書を引いても、かの大槻文彦の『大言海』(富山房、新訂等も含む)にも、落合直文の『言泉』(大倉書店、改修等も含む)にも、居場所という言葉は登場してこない。

現代の代表的な国語辞典である『広辞苑』(岩波書店)、『広辞林』(三省堂)、『国語辞典』(集英社)等を引いてみても、「いるところ」「居る場所」「いどころ」「居所」「座る場所」などと、当たり前過ぎるというか、答になっているような、なっていないような、差し障りのない、けっして間違いではないけれども、お世辞にも明解とはいいたがたい記述しか出てこない。

そんな中、大部過ぎて普段はあまり引く機会がない『日本国語大辞典』(小学館)に、ようやく居場所という言葉の居場所を見出すことができる。そこには少々、納得の行く解説が掲載されているのだ。いわく、「①人などが住んでいる所。居どころ」……に続く第二義として、「②人が世間、社会の中で落ちつくべき場所。安心していられる場所」。

この②の意味合いこそ、私が考えている「居場所」の持つ意味に近いといえよう。

これからもろもろの視座から縦横無尽に居場所を論じるに先立って、まず私は、この②の意味合いを敷衍させて、陰翳に富んだ、他国語にはない、定義の曖昧な「居場所」という言葉を、～その実態（ザイン）と、そうあってほしいありよう（ゾルレン）とを含めて～、以下のよう規定しておきたいと考える。

私の言う「居場所」とは、・・・それぞれの人にとって、安心安全な場、心安らぐ場、心地よく落ち着ける場、自分が必要とされていると感ずることができる場、自分が愛されていると感ずられる場、帰属感のようなものを味わえる場、しみじみと生を実感できる場、志向や思考、さらには思想信条等において共感し合える場、共感的相互理解が発酵する場、その共感をもとに連携し、連帯し合える場、時には邪悪な国家権力に対する抵抗の拠点ともなりうる場、そんなこんな場・・・である。

これらの居場所は、個別的、基本的には具象的、可視的な小規模な「居どころ」である。しかし、この場はやや抽象的には、全体としては不可視的なふるさと、国、地球といった膨大な存在をも指し示しうる。継続期間に関しても、一過性的なかなり短い「居どころ」もあれば、相当に永続的な「居どころ」も存在する。

畢竟、「居場所」という存在は、規模において大小さまざま、継続する（自らが所属する）期間において長短さまざまなのである。

だから・・・、それは、胎内であつたり、母の膝だったり、愛しい人の胸のなかだったり、家であつたり、自分の部屋だったり、隠れ家的な場であつたり、時には職場のような働く場であつたり、～例えば、本稿でも触れた香織ちゃんのお母さんの勤めるみどり食堂とか、勤め人にとっての会社、お相撲さんにとっての土俵、職業野球選手にとっての球場、俳優にとってのオープンセットやロケ地そして結果としての銀幕そのものとか～、児童にとっての学童保育施設だったり、児童生徒にとっての小学校や中学高校だったり、学生にとっての大学だったり、部員たちにとっての部室だったり、読書好きにとっての古書市だったり、図書館だったり、釣りキチにとっての釣りの穴場だったり、諸々の趣味の集いの場だったり、勉強会の場であつたり、政治団体だったり、資格審査が厳しい閉鎖的なクラブだったり、秘密結社めいた組織だったり、はたまたふるさとだったり、国だったり、地球という惑星だったり・・・。

2. 序論（その2）、スマホ、あるいは「居場所のようなもの」

昨今、年代を問わず、少なからぬ人びとの小さな小さな「居場所のようなもの」になってしまっているのがスマホだ。何処でも此処でも、ありとあらゆる公共の空間においても、電車やバスの車内でも、道路を歩きながらでも、この5.5センチ×9.5センチの小さな画面に吸い寄せられている人びとの群れ・・・。身近に存在している人たちを殆ど無視して、自分の世界と錯覚している画面の奥の所与の既存のデータを弄ぶことに熱中する人びとが世間に溢れかえっている。

この光景は異様であり、異常であり滑稽でもある。

東京の雑踏でのことだ。決して狭くはない歩道で、腰の曲がったお年寄りが、杖を頼りにうつむき加減でゆっくり歩いていたところを、前を見ないでスマホの画面に目を落として早歩きしてきた若者にぶつかられて転倒して、顔面から血を流して痛がっている場面に出くわしたことがある。驚くべきことには、私が、そのお年寄りを介抱しているのを良いことに、ぶつかった当人は人混みに紛れて立ち去っていった。「待って！」と叫んだ私の声が、逃げるように走り去ったその男に届いたか否か。

私自身も歩道を歩くときには、前も見ず食い入るようにスマホ画面に集中している人たちから、自らの身を守るべく、前をキッと見据えながら、かつ右往左往しながら歩いている。それでも、その類の歩行者に何度、ぶつかられそうになったことか。

帰宅途次であろうか、薄暗い夕刻、自転車をこぎながらスマホの画面に集中している危なっかしい高校生たちの姿も日常的な光景になってしまった。

「一人じょうず」のための格好な「居場所のようなもの」としてのスマホは、確かに便利で、小賢しい情報や軽薄な知識を手っ取り早く得る道具としては極めて優れている。これを活用しない手はないのかもしれない。

しかし、多くの人びとの「居場所のようなもの」になってしまっている、この便利な文明の利器は、先の例のように、のめり込んでしまい、他者の存在を忘れてしまい、周囲への配慮を欠けば、簡単に恐るべき凶器に変貌してしまう。

今日の人間関係の稀薄化の元凶と言われては、スマホも立つ瀬があるまい。やはり、そうした文明の利器を売る側の良識（＝販売に際して最低限の注意喚起をすること等々）も問われようし、それを買って使用する側の良識（＝最低限のルールを遵守すること等々）も求められる。

利用する人は、くれぐれも依存症に陥らないよう、ス

マホを自らの「居場所のようなもの」にまでは、してしまわないように心がける必要があるだろう。

こうした文明の利器が必要以上に幅を利かせ、人びとにとって「居場所のようなもの」になってしまっている一因は、畢竟、人びとが本来、保持すべき居場所を確保しえていないせいといえるのではないだろうか。人びとが、それぞれに心地よい居場所を持ち、そこで心休まる人間関係を有しているならば、これほどまでに、スマホが蔓延り、フェースブックが流行することもなかったであろう。

3. 序論（その3）なぜ居場所を考えるのか、あるいはなぜ居場所が必要なのか

非常に幅広く恣意的に用いることが出来る言葉ではあるし、普通に「居る場所」「居どころ」という感じで捉えてしまえば、それこそ、なんということのない言葉なのだが、先に私が規定したような意味合いの存在として、少し肯定的、限定的に捉え直せば、「居場所」は燦然と輝き始める。

歴史的に日本そして時に世界の状況と絡み合わせて考えてみる時、こうした意味合いを有する「居場所」はじっくり問い直したい大切な存在のように私には思えるのだ。

なぜなら、第一には、歴史的課題として、ごく最近に至るまで、我われ人間社会の重要な構成員である子どもたちには、子どもとしての明確な居場所が与えられていなかったという事実を鑑み、改めて日本に即して、その理由と実態を浮き彫りにしておきたいと考えるからである。

第二には、今日的課題として、もろもろの居場所は、個々の人びとにとって、日常的な心地よい生活の場というだけでなく、次々に押し寄せる困難な諸状況に対する防波堤、ひいては状況に立ち向かう根拠地ともなりうる場と考えるからである。

第三には、昨今では、個々の人びとが、こうした心地よい居場所を確保しにくくなっているからである。保持したいような居場所をもてなくなっているから、スマホのような安易な、一応、孤独からも逃れられるような錯覚を生じがちな「居場所のようなもの」のなかに逃避してしまうとも考えられよう。

もろもろの居場所は、個々の人びとにとって、胎児の時代から幼少年期、青年期、壮年期を経て老年期に至るまで、具体的、実際的な大小の生活の場であり、また、心の拠りどころでもある。

もろもろの居場所は、個々の人びとにとって、安息の場、幸せを実感できる場であるとともに、自主自立の拠点であり、明確に自己確認できる場、帰属感を抱くことができる場でもある。

個々の人びとが、それぞれに自らが拠って立つところの確たる居場所を持っているならば、個々ばらばらになってしまって、易々と状況に流されることもなく、既成のお仕着せの権威に迎合することもなく、例え誠意と想像力を欠く邪悪な国家権力が出来（しゅったい）したとしても、その意のままに操られることもないであろう。

個々の人びとが、それぞれに心地よい居場所を持っているならば、個々が孤立感を深め、無力感に苛まれ、自暴自棄に陥ったりすることも防ぐことができよう。

こうした、もろもろの居場所は、例えば超国家主義的な国家権力が、庶民の願いを置き去りにして、特定秘密保護法制定、武器禁輸の解除、解釈改憲による集団的自衛権容認等々、戦争を惹起せしめるような方向へと暴走し始めた時には、そうした危険な動きに歯止めをかけ、邪悪な意図を覆す結衆の原点となり、拠点にもなりうる」と私は考えている。

そうしてみると、もろもろの居場所は、心安らぐ場、寛げる憩いの場、生きていることを実感できる場、愛を感じられる場、自分が必要とされていると実感できる場であるとともに、うまく機能すれば、かつての共同体のように、さりげなく邪悪な国家権力に対する実際の、また思想的な抵抗の拠点ともなりうる場として捉えることができよう。

けれども昨今、多くの子どもたち、青少年たち、女たち、男たち、大人たち、老人たちが、そうした心強く心地よい自らの居場所を失ってしまっている。あるいは見失われている。

子どもたちなど、近代に至る過程のなかでようやくルソーらによって「発見」され、やっとその存在にふさわしい居場所を確保し始めた途端に、またそれらを失いかけているのだ。

あらゆる年代、世代において、もろもろの心安まる居場所がどんどん少なくなっているのが今日の状況といえよう。

多くの人々が、精神的な拠りどころのような意味合いを有する永続性のある「居場所的な存在」をも喪失してしまっているかにもみえる。

こうした状況は、邪悪な国家権力、支配層にとっては極めて都合のいい状況といえることができる。

寄る辺ない大衆は、国家権力にとっては至極、統御しやすく、分割的に統治しやすい存在だからである。

さらに言うなら、居場所に関しても格差社会が現出している。詳しくは本文に譲るが、豊かな者、富める者、支配層の人びと、強者たちは勞せずして心地よい居場所を得やすく、貧しい者、被支配層の人びと、弱者は心安らぐ居場所を得ることもままならないどころか、苦勞の末にようやく獲得した居場所すら奪い去られかねない。

また、あまりにも、世の中の移り変わりが速く、昨日の最先端技術が今日にはもう古くなり、明日には使い物にならなくなっているような状況は、科学技術の分野における悪弊というに止まらず、人びとの思考から永続性のある思想信条を構築するような志向を奪うことにも繋がっている。

人間が何事につけ、永続性をあまり信じられなくなってしまうているのだ。

そんななかで、日本では、国家権力が善良な市井の人びとの日常的な居場所、さらには精神的な拠りどころとしての「居場所的存在」「居場所のようなもの」を無造作に奪って顧みないような状況が少なからず惹起している。

沖縄において広大な面積を占める、危険極まりない他国軍の基地の存在、福島において炉心溶融を起こし、未だに統御不能な状態のままの原発の存在・・・、これらは、国家権力がその地の人びとの心地よい居場所を奪い去ったまま、その状況を傲然と永続させている典型的な事例といえよう。

こうしてみると、我われは、本来的に永続すべき大切なものを喪失し、あるいは喪失させられ、逆に、永続すべきではないものを永続的に押し付けられているという構図がはっきりと浮かび上がってくる。

我われには、健康的に楽しく愉快に有意義な日常生活を享受する権利がある。その権利を守るためにも、心や体を空っぽにされてしまわないためにも、いざという時には明快に言いたいことを言い、邪悪な国家権力ときちんと対峙するためにも、結衆の原点そして拠点ともなりうる、もろもろの居場所を確保しておくことが肝要ではないだろうか。

このような視座のもと、ゆくゆくは本稿に、《居場所論：子ども篇》として、居場所の無かった前近代の子どもたちの歴史的状況に触れた拙稿、《居場所論：日常・世代・生活篇》として、生まれる以前から、生まれて後、幼少時から少年少女時代、青年時代、壮年時代、老年時代そして死に至るまで、さらには死後も含めての实际的、精神的なもろもろの居場所に関して、広範に縦横無尽に考察を加えた拙稿、《居場所論：文人墨客先人篇》として、先人たちの希求した居場所を探った拙稿等々を交ぜ合わ

せ、渾然融合一体化させて、総合的な「居場所論」へと成長させていきたいと考えている。

4. フィールドワーク：こたつ、あるいは日本の冬のみんなの居場所

悠太郎くんは、おばあちゃんとこたつが大好き。北風の冬は、子どもは風の子じゃなくて、こたつの子よろしく、こたつに入り浸り。おばあちゃんの昔話を聞くのが趣味っていう子だった。

そんな悠太郎くんのこたつ論を拝聴しよう。

こたつっていいよね。

頭寒足熱の理にもかなってるよね。

ロシアのペチカとか、ヨーロッパの国々の暖炉とか、韓国・朝鮮のオンドルとか、・・・暖房器具にもそれぞれお国柄があるね。

かつての日本で、ごく一般的に見られた囲炉裏は、暖房器具であり、調理器具でもあり、ひいては木造家屋を補強する煙を出す装置でもある優れモノだったよな。

それだけに止まらず、囲炉裏端っていえば、主座、カカ座、客座などなどが決まっていたりして、家父長制的な名残りもあるけれど、団欒憩いの場、語らいの場、もてなしの場、食事の場などなど、多機能を発揮する素晴らしい家族の居場所だったよなあ。

でも、今や伝統的な日本家屋からも、囲炉裏はほとんど姿を消してしまったね。

ちょっと惜しいよね。

で、かろうじて残っているのが、こたつ。

囲炉裏に比べると、なんか、すごく矮小な、ちまちました暖房器具って気はするけど、これはこれで日本の冬の風物詩だよなあ。

雪やこんこ

霰やこんこ

降っては降っては

ずんずん積もる

山も野原も綿帽子かぶり

枯れ木残らず花が咲く

・・・

犬は喜び庭駆け回り

猫はこたつで丸くなる

(童謡「雪」、作詞・作曲不詳)

これは、もう眼に浮かぶ日本の冬の原風景だね。

猫が丸くなって眠ってるこたつっていうと、家族団欒の図が脳裏に思い浮かぶね。

みんな、こたつに足を入れ下半身は布団で隠し、上半身だけ見せながら、台の上に手を出して、お煎餅をガシガシかじったり、ムチュ〜とおもちを食べたり、みかんの皮をむいて、一房、一房、口に運んだり、渋茶をすすったり、あれこれなにかにと取りとめもないことを話したり・・・。

なんだか、とても平和な気分。

今では掘りごたつのある家は少なくなっちゃったけどね。

悔しいなあ。惜しいなあ。

建て替える前の悠太郎んちには掘りごたつがあったんだよ。

おばあちゃんが朝早くから火をおこして、炭を焼いて、まっかつかになった炭を五、六本、炭入れに移して、こたつまで持ってきて、難しいかっこうをして、炭を掘りごたつの真ん中の正方形の灰のある場所に安置するんだ。

そして、僕が近くにいとくと、

悠坊、炭の回りにうっすら灰を掛けといとくれ

って言うんだ。

僕が、おばあちゃんの言う通り、火箸でさらさらの灰を、うっすらと炭の回りに掛けてると、さっと三毛猫のつけ丸がやってきて、誰よりも早くこたつの中のなぜか東南角の場所を占拠して、早速、丸くなるんだ。

安心しきった何とも言われない姿だよ。

つけ丸にとって、ここが冬の最上の居場所みたいだよ。

そういう悠太郎も、冬の雨の日の鬼ごっこなんかの時には、よくこたつのなかに潜り込んだけどね。

時どき、慌てて潜り込んで、つけ丸の尻尾を踏んじやって、「ミギャア〜！フギャア〜！」なんて大怒声を出されて、すぐに見つかってしまったりしたもんなあ。

だから、鬼にされたのはつけ丸のせいだって、ちょっと恨めしく思ったりしたけど、それこそ、これは逆恨みっちゃうもんだったよなあ。

つけ丸、ごめんな。

おじいちゃんは、朝からこたつに入って、読書したり、お手紙を書いたり、囲碁の教本を片手に碁を打つ風をしたり、・・・。

昼ごはんの後は、決まって気持ちよさそうに、こっくり、・・・こっくり、が〜び〜、び〜が〜、こっく

り、・・・が〜び〜、こっくり、こっくり・・・。

居眠りしながら、時に、盛んだった壮年時代を思い出してか、寝相にも得意満面みたいな表情を浮かべたり・・・。

時に、楽しかった青春時代を思い出してか、恋焦がれてた彼女を思い出してか、なんとも純な頬笑みを浮かべたり・・・。

おばあちゃんも、自分で準備し終わると、朝からこたつに入って、繕い物をしたり、虫眼鏡片手に、小さな声をモシヨモシヨ、モシヨモシヨ出しながら新聞を読んだり、悠太郎にいろんなことを教えてくださったり、・・・昼ごはんの後は、きまって気持ちよさそうに、く〜く〜・・・く〜く〜・・・。

座いすにもたれかかっているから、おじいちゃんみたいなこっくりは、あまりなかったけどね。

お父さんやお母さんも帰ってくると、おばあちゃんが炊いておいてくれたご飯や作ってくれてあるお菜に、さらに一、二品をささっと加えて、こたつに持ってくる。

こたつを囲んで楽しい夕餉だよ。つけ丸も傍で、「みゃあ〜」と幸せそうに仲間入り。

こたつは、家族みんなの、そして、つけ丸の冬の家のなかの最高の居場所だったなあ。

5. フィールドワーク：縁側・縁台、あるいは日本の夏みんなの居場所

夏の風物詩といえば夕涼み、夕涼みといえば縁側、濡れ縁、縁台、・・・。

しかし、どれもこれも、昨今では、お寺や伝統的な日本式の家屋など稀少な例を除けば、目にすることが難しくなってしまった。

三郎兵衛くんは、この縁側、濡れ縁、縁台等に関して一家言を有しているようだから、少々彼の話を聞いて見よう。

今では、「縁側」っていったら、寿司のネタを真っ先に思い出す人も多いみたいだね。

かつては日本の伝統的な家屋には付きもので、重要な役割を果たしていた楽しいみんなの居場所だったのにな。

暑い夏の夕方、涼を取るのに、もってこいの場所だったしね。

涼しさや縁より足をぶら下げる

(各務支考)

夏の江戸庶民の生活の一端が脳裏に浮かんでくるような秀句だね。支考さんらしい、涼しさが伝わってくるけど、温かさも伝わってくる句だなあ。

縁側は、座敷等の部屋の外縁に付いている板敷の部分。いってみれば、屋内と屋外との結節点だよな。ふつうには、縁側の外周に雨戸の敷居があるから、これはウチってことになるけどね。

かといって、完全にウチとは言い切れないところが、縁側のミソだよ。

濡れ縁は、雨戸の敷居の外側にあるから、同じ縁側でも、これはもう、開放的なソトだよな。

かといって、完全にソトとは言い切れないところが、濡れ縁のミソだよ。

この縁側そして濡れ縁の存在は、家と庭、ウチとソトとの連続性をもたらしてくれてたよな。この存在によって、家というウチの空間と庭というソトの空間が一体化してたもんね。

子どもたちや猫たちは、縁側や濡れ縁があるから、家から庭、庭から家へと自由に出入りして、飛び跳ねてたしね。

三郎兵衛のおばあちゃんも、縁側が大好きで、小春日和の日がな一日、縁側に座布団を敷いて、その上に端然と座って日向ぼっこしながら、本を読んだり、庭を眺めてたりしてたなあ。

それを知ってるかのように、お隣のちよおばあちゃんやお向かいのかずえおばあちゃんたちは、うちの門をくぐると、玄関は通過して、ぐるっと庭先に回ってきて、「こんにちは」と言うか言わないかのうちには、もう、縁側のおばあちゃんの隣に「よっとこせ」と腰掛けてるんだ。

そんな時、おばあちゃんは、「まあ、お上がり」って、座敷へ上がることを勧めることもある。

だけど、大概は、陽だまりになって暖かい縁側が、そのまま、おばあちゃん連のおしゃべり時間の格好の居場所になるんだ。

完全にソトでもない、かといって、完全にウチでもない、この気軽な空間が、主人と客といった、面倒な関係性を取っ払ってしまってくれる風情で、主客の別なく、遠慮なく、話が弾むんだなあ。

この関係性は、おばあちゃん連に限ったことではなく、お母ちゃん連でもそうだし、お父ちゃん連でも、もちろん、子どもたちでも同様だったよ。

三郎兵衛の友だちの博夫くんや修太郎くんや洋一くんや栄くんや幸二くんや孝くんや健次くんたちも、やっぱ

り門を入ると玄関は素通り、ぐるっと回って庭先から縁側へやって来る。大抵はそこに居るおばあちゃんに、

こんにちは～、おばあちゃん！三郎兵衛ちゃん、居る～？

って、聞くときには、既に縁側に座りかけてるんだよ。で、僕が出てくるまで、おばあちゃんと、ひとしきり四方山話。

そんなだから、おばあちゃんも、僕の友だちを孫様に可愛がってくれたし、友だち連中もみんな、僕のおばあちゃんを自分の本当の祖母みたいに思ってたなあ。

三郎兵衛が、保隆ちゃんちとかに遊びに行ったときも同じ感じで、門を開けたら、庭先から縁側に突進する。やっぱり、縁側には、保隆ちゃんのおばあちゃんが居ずまいを正して座ってて、僕が「おばあちゃん、こんにちは～」って、言うか言い終わらないうちに、

三郎兵衛ちゃん、おいでか。保隆ちゃんは、今、文房具を買いに島屋敷通りの勉強屋さんまで行ってるから、ちょっと待っててね。

って言いながら、縁側に席を作ってくれた。

保隆ちゃんが、鉛筆と消しゴムを買って帰ってくるまで、僕は、このおばあちゃんに縁側で楽しいお話を聞かせてもらったり、お饅頭とお茶をよばれたりしていたよ。

縁側っていうのは、本当に気軽に同世代同士だけでなく、異世代の人たち同士も気易く交流できる気楽な居場所だったよな。

こんな素敵な交流の居場所としての機能を有する縁側は、地面から、高く立ち上がっているから、日本のような湿潤な気候風土のところには好適な建築上の装置でもあるよね。

お隣の韓国では見かけるけど、西洋建築ではけっして見ることでできない、ウチとソトとの間の中間的な場所に位置する縁側っていう存在は、巧まずして気軽に人間関係を展開するための小さな社会装置的な居場所、日常的な気さくな祝祭空間と言えるかもしれないなあ。

縁台だって、真夏の夕刻や宵の風物詩だったよね。

この縁台は、どこでも好きなところに手軽に移動させることができる簡便な縁側って言えるよな。木や竹の触感がなんともいえないしね。

縁台に座って、きれいな素足に浴衣がけのおねえさん

たちが、チッ、チッ、チッ、シャカ、シャカ、チッ、チッ、シャカ、チッ、チッ、・・・ジ〜、ポタツと線香花火の儚い生涯を見つめてたなあ。

橙色が人生みたいで印象的だったね。

同じく路地裏の縁台では、ステテコ姿の御隠居さんやおっさんたちが、真顔で、パチッ、パチッ・・・と将棋や囲碁に打ち興じてたっけ。縁台将棋っていうと、へぼ将棋の代名詞みたいにいわれるけどね。

その周りで、子どもたちが、線香花火のジ〜、ポタツ・・・に嘆きの声を上げたり、おっさん連の将棋や碁を観戦したり・・・。おっさん連も駒を差しつつ、得意になって、子どもたちに定石を教授したり・・・。

ちょっと年かさの子は、浴衣姿のおねえさんの裾からさり気なくのぞく透き通る白い素足に、室生犀星さんの『性に目覚める頃』みたいな仄かな感覚を覚えたり・・・なあんてこともあったよなあ。

下町情緒っていうか、・・・なんか人情も風情もあったよね。

竹製ないしは木製の縁台は、柔らかくてあったかいし、人家と人家に挟まれた狭い路地の人びとの交流を促進する、かけがえのない居場所だったね。

6. フィールドワーク：つよっちゃんの居場所、あるいは人生を多彩に楽しく有意義にする場

みんな、個々それぞれの人生の時どきにおける、多彩な人間関係、いろんな交遊、多彩な趣味、いろんな特技、多彩な経歴、いろんな経験などを通して、個々の人はいろんな居場所と出会う。

殿助くんのずっと年上の友だちのつよっちゃんは、その人生のなかで、とっても有意義な素敵な多くの居場所と、たった一つの酷い居場所に出会ったって言ってたそう。

殿助くんに、つよっちゃんの居場所を語ってもらおう。

つよっちゃんは、京都の中京の名家に生まれて、幼少期から青年時代にかけては、大きな会社を経営する両親の豪邸に住んでいたよ。

幼少時には、彼の生家の、その京の大きな旧家は、そのまま彼とその仲間たちの遊び場だった。

学生時代も、親元から通っていたけど、機械工学の研究室や実験室が彼の心地よい居場所だったみたいだなあ。

何しろ三度の御飯より勉強のほうが好きって人だったからなあ。

一緒に勉強するという名目で、下宿生のせいいち君や寮生のブンちゃんの部屋なんかも彼の居場所になっていた。

百万遍界限の雀荘や喫茶店も彼の格好の息抜きのための居場所だったよ。ガロの「学生街の喫茶店」じゃないけれど、かつては、喫茶店でというのが学生たちにとっては大切な居場所で、かんかんがくがく喧々囂々、議論の場、さまざまな出会いの場だった。

音楽喫茶「田園」っていう居場所がなかったら、岸部一徳さんと沢田研二さんの出会いもなく、ザ・タイガースも誕生してなかったかもしれないものね。

土曜日に野外演奏会が開催される円山音楽堂は、管楽器も弦楽器も好きなつよっちゃんにとっては週末の憩いの居場所だった。

彼はまた無類の読書家だったから、丸太町通りや寺町通り、京大近辺の古本屋の親父たちとはほとんど友だちみたいな関係だったし、よく古本屋自体が彼の居場所と化していたね。

京洛で四季折々、下賀茂神社とか知恩寺とかで開催される古書市ともなると、その場は早速、彼のいつときの居場所になるんだなあ。

つよっちゃんは、同居してた母方の登美子おばあちゃんが大好きだったから、休みの日には、彼女の昔語りを聞いたり、自分の勉強の進展具合なんかを話したりするのをとっても楽しみにしてたよ。

その際の彼らの心安らぐ居場所は、夏なら夕涼みの縁側、早春や晩秋なら言わずと知れた日溜まりの縁側、冬ならほこほこの掘りごたつ。殿助にとっても縁側や掘りごたつはとっても寛げる居場所だけだね。

そんなこんないろんな居場所と出逢いながら、勉学に励み、師や友との交遊を楽しんでいたつよっちゃんだった。

だけど・・・

太平洋戦争末期、敗色濃くなった日本の指導層が学徒動員などという非情な決定を下したことに伴い、彼も海軍予備学生として出征を余儀なくされてしまったんだ。

その後、敗戦に至るまでは軍隊が彼の居場所になったよ。

彼は書き遺した文章で、旧日本軍はイジメが常態化した陰湿な組織だったと述べている。

戦争自体が、人間を人間でなくしてしまう愚かな営為とも語っている。

動員＝徴兵されて、否応なく所属せざるをえなかった旧日本軍という組織は、彼にとっては、いじめを受け、理不尽な私刑を受け、酷使された人生で最悪の居場所だったんだって。

つよっちゃんは科学者だったから、常々、「世に生起する現象で絶対ということは、絶対にありえない」って言ってたけど、その彼が、

良い戦争なんていうのは絶対にありえない。悪い平和というのも絶対にありえない

って言ってたのが印象的だなあ。

確かに、戦争を起こす指導者は、何かにと美辞麗句の大義名分を並べて、戦争を美化するけど、美しい戦争なんてありえないもんね。

戦争は「起こる」んじゃないくて、邪悪な政治家らが「起こす」もんだよな。

その戦争を「起こす」決定を下した人たち＝政治家や高級官僚や高級将校たちは、澄ました顔で後方の安全な楽ちんな居場所に鎮座しているだけなんだよな。

戦場を居場所にさせられ、日々、殺すか、殺されるかという窮極の状況下に置かれ、人間性を壊されるのは兵士や下士官たち。

戦争の犠牲になるのは、常に弱い立場の無辜の民、女性、老人、子どもたちだもんね。

つよっちゃんは、軍隊生活を通じて、痛いほど、それを実感したって言ってたよ。

不幸中の幸いにして、戦死を免れ、敵と目された人を殺すことをも免れた彼は、多くの優れた学友を失ったことを悔やみ、正面切って戦争に反対することができなかったことを悔やみ、戦後は反戦平和のために自分なりに出来ることをしようと誓ったんだ。

そのため、比較的、社会に向かって自由に発言しやすい学者になることを志向した。

もともと勉強好きな彼には、ぴったりの職業だったみたいだね。

大学そして研究室は、つよっちゃんの職業上の居場所になったけど、そこは仕事場であるだけでなく、同僚の学者たちや学生たちと真剣に討議したり、楽しく談笑したりできる居場所であり、沈思黙考できる居場所でもあったみたいだなあ。

戦争が終わって、世の中はまだ混乱の只中で貧しかったけれども、学究生活に入れた彼など、運がいいほうだったよ。

つよっちゃんの大好きだった三つ年上の兄のやまちゃ

んなんかは、中国東北部に派遣されていたから、そのままソ連軍に拉致されてシベリア抑留の憂き目に遭ってしまったしね。ひどい宿舎に放り込まれて強制労働の日々。

それでも、まだやまちゃんは、旧大日本帝国陸軍少佐だったから、兵の取りまとめ役として利用され、したがって、ちょっとは優遇されもしたようだけど、兵卒だった人たちは奴隷同然の酷い扱いを受けてたんだって。

この時期、この兄弟の居場所には天国と地獄の差があったよ。

学究生活が軌道に乗ってきたつよっちゃんは、やがて同僚のみやたにさんが紹介してくれた東京の女性、とんちゃんと付き合い始め、葵祭の日に結婚したよ。

その日から、彼らは親元を離れ、木造の質素な集合住宅を借りて新婚生活は始めたんだ。

四畳半と六畳の二間に、台所と風呂・便所の粗末な新居だったけど、つよっちゃんととんちゃんにはこの世の黄金郷、わくわくどきどきの居場所だったみたいだよ。

この新居からは、哲学の小径が真近いので、二人は休日には決まって、この道を散歩したんだって。

だから、この道、そして銀閣寺、法然院、南禅寺なんかが二人の休日における居場所だったよ。春には桜、秋には紅葉を愛でながら。

いかにも京洛の住人らしい居場所だよなあ。

やがて、つよっちゃんととんちゃんは子どもを授かった。

さっそく、二人は、大文字山麓の、三畳と四畳半と六畳の三部屋がある借家に移り住んだ。

そこで、二人目の赤ちゃんが誕生し、上の男の子は、そろそろ家中を走り回る年齢に達していた。

それを機に、つよっちゃんととんちゃんは、「孟母三遷」よろしく、子どもたちの学ぶ環境、遊ぶ環境をも考慮して、思い切って洛北の閑静な住宅街の一角に土地を求め、二階建ての瀟洒な家を建てたよ。

近い将来を見越して、子供部屋も二部屋作り、みんなが憩える大きめの居間には掘りごたつも特注、もちろん縁側や濡れ縁もぬかりなく設け、お客さんが大好きな二人は客人（まろうど）歓待のために玄関脇に三十人くらいは軽く収容できる応接間も配置した。

もちろん、諸井薫さんが言うような家族からの逃避のための居場所じゃなくて、帰宅後も、どうしても勉強したい時、沈思黙考したい時のためにつよっちゃん用の書斎も確保した。

とんちゃんがお茶や生け花を学んだり教えたりするための茶室を兼ねた彼女用の部屋も。

少し大きめの庭も付いていたので、息子の左近くと飼い犬の多良之助は大喜びで駆け回り、飼い猫の知多丸は夏は縁側、冬はこたつで丸くなっていたんだって。

それぞれが家のなかでも、格好の居場所を得て、生き生きしている図がほうふつと脳裏に浮かぶよなあ。

学齢期を経て、成長した左近くんは、建築の勉強のためにイタリアはベネチアに渡り、娘の蘭華ちゃんは、文化人類学を学ぶためにカリフォルニア大学パークレー校に留学することになったよ。

大きめの家には、主の居ない部屋が増え始めた。

そうこうしているうちに、つよっちゃんは定年退職の時期を迎えた。

これを潮時に、二人は、二人暮らしにはちょっと大きすぎる家を手放す決心をした。そのついでに、若いころからの夢だった海外での生活に踏み切るのだった。

二人は、洛北の住み慣れた家を借しげもなく売り払い、ロサンゼルス郊外のニューポートビーチの高台に建つ洒落た造りの集合住宅を購入、さっさと米国に移り住んだよ。

相変わらず客人歓待の二人だったので、四寝室の付いた大き目の区画を買った。ほど近いところに留学している蘭華ちゃんはもちろんのこと、左近くんも休みの度にやってきた。日本からは千客万来だった。

二人は、国道 66 をロサンゼルスからシカゴまで車で旅をしたり、ひとつ飛び、ニューヨークに歌劇を観劇に行ったり、フロリダやアーカンソー、ワイオミング、テネシー、さらにはカナダやメキシコまで足を延ばしたりして、ゆったり米国生活を楽しんだ。いつの間にやら、北米の大地そのものが彼らの居場所になっていた。

やがて、つよっちゃんが傘寿を迎えたころには、とんちゃんも喜寿の齢になっていた。

以前のように、二人で交互に赤葡萄酒色のリンカーン・コンチネンタルを駆って全米を走り回るような体力はなくなってきた。

とともに、二人ともども、「人間、至る処青山あり」の気持ちだったのが、なぜだか望郷の念が止み難くなり始めたことを自覚するに至った。

そうすると、また決断が速い彼らで、日本は京都在住の友人、せいいちさんに連絡して、京都の都心にも近く、しかも閑静な烏丸今出川上ルあたりに好物件を探してもらうことにした。

二人暮らしだし、客人歓待の気持ちは変わらないけれど、これからは、客人は家にお迎えするのではなく、ソトで会うことにした。

それゆえ、居住空間としてはそんなに広い空間は必要

ないということになった。

①二人で済むのに大き過ぎず小さすぎず、②閑静、③買い物に便利、交通至便という三条件をもとに、せいいちさんは探してくれた。

御所のすぐ西に位置し、緑も豊富で、堀川商店街や出町にもほど近いので買い物にも便利な、二人暮らしにぴったりの大きさの集合住宅が見つかった。

さっそく彼らは、ニューポートビーチの集合住宅を売却し、にこにこ顔で京都に戻ってきた。

今では、この御所西の居場所を根城に、ゆったりゆっくり同行二人、京都や奈良の古寺巡礼の日々だよ。

彼らは、終の棲家の居場所は自分の家と決めている。

臨終に際しての居場所が、病院とか介護施設ではないように、往診してくれる家庭医や身の回りの手伝いをしてくれる人たちも見つけるなど万全を期している。

こんなつよっちゃんやとんちゃんじゃなくても、みんな、誰にとっても、人生は、居場所探しの旅路なんだよなあ。

かくいう殿助自身も心地よい自らの居場所を探しながら人生を彷徨っている。

7. 補遺、あるいは改訂版：居場所としての沖縄

1952 年、ようやく日本が第二次世界大戦敗戦後の連合国側による占領統治から脱した後も、沖縄だけは取り残され、実質的には米国の統治下に置かれ続けた。

そんな非情な非常事態のなかで、1954 年の夏、沖縄からボリビアへの移民が始まった。

もともと移民先進県で、戦前にも、ハワイ、米国本土、カナダ、ブラジル等々の海外各地に多くの移民を送り出していた地域での出来事のうえ、当時の沖縄は日本のなかの一つの「県」ではなく、琉球政府のもと、米国の統治下に置かれていたので、この一件は全国的にはあまり目立たず、ほとんど取り沙汰されることもなかった。

しかし、この時のボリビア移民の人たちのほとんどは、沖縄における米軍基地建設の犠牲者だったのだ。

同年までに、沖縄における巨大な面積に渡る米軍基地の建設が終わった。

残されたのは、土地を取り上げられた人びとと、これまで基地建設に携わってきて、使い捨てよろしく職を失った人びとだった。

彼ら、大切な自らの居場所を喪失させられた沖縄の人びと約三千数百人が、万止むを得ず、ボリビアの大地に

新天地を求めて移民を決意したのだった。

こんな自らが望まないかたちでの移民も珍しい。

米国、米軍の一方的な都合で本来の居場所を取り上げられ、右も左も何も皆目、分からない地球の真裏への移住を余儀なくされたのだ。

これが不条理でなくて、何が不条理であろうか。

こんな理不尽なことを、米国は、沖縄全土を恒久的な米軍基地にして、自国の圧倒的な軍事的優位をいっそう確実なものにするという世界戦略のもと、平然とやってのけた。

琉球政府は、戦勝国米国のごり押しの前には、あまりにも無力だった。

敗戦国日本の政府は、ようやく占領状態を脱して、再「独立」したばかりで悲惨な沖縄の同胞の窮状には無関心だった。というより、再「独立」のために、沖縄を人身御供として米国に差し出したと言ってもけっして言い過ぎとは言えまい。

こうして移民を余儀なくされた人びとを地球の裏側で待ち受けていたのは、開墾が可能かどうかすらも分からないような奥深いアマゾン川の源流にほど近いボリビアのジャングルと得体の知れない風土病だった。

新天地と思って乗り込んだ大地は、新たな居場所とするにはあまりにも無残な場所だった。

私は、かつてボリビアのコロニア・オキナワやサンファン移住地そしてサンタクルス市等において人類学的調査を行ったことがある。今では日系の人びとはボリビア農業の欠かせない担い手となって活躍し、同国農業を豊かにした人びととして現地の人びとから敬愛されていることを知るとともに、そこに至るまでの苦難は筆舌に尽くしがたいなどという月並みな表現では到底、足りないような困苦だったことも思い知ったことだった（この辺りに関して詳しくは、天沼香著『故国を忘れず新天地を拓く〜移民から見た近代日本〜』[2008年、新潮社]等を参照されたい）。

居場所としてのチュラシマ沖縄を失ったシマンチュの人びとは、風土病で多数の仲間を失い、転地を繰り返すなど幾多の苦難を乗り越えて、ジャングルを切り裂き、耕地に仕立て上げ辛苦の果てに、茫漠たる南米ボリビアの大地にようやく自分たちの新たな居場所、オキナワ村を造り上げたのだった。

この地球の裏側のオキナワ村の古老、比嘉朝規さんは、私にこんな体験談を語ってくれた。

見上げる夜空に冴え渡る満天の星だけが、疲れ果てたわたらの心身を癒してくれたよ。煌く星を

眺める以外には何の慰めもなかったな。そんなわたらの我慢や頑張りは、やがて忘れられていくじゃろうけど、わたらが自分たちの手で必死になって造り上げたこの新しいオキナワはずっと未来まで残るじゃろ。この、わたらとわたらの子孫のための居場所は、今度こそはもう誰にも渡さん。

辛苦を嘗め尽くした人の言葉だけに万感の思いが籠っていた。

日本の「独立」から遅れること20年、ようやく1972年に至って、沖縄は「核抜き・本土並み」という触れ込みで、日本に返還されることになったが、実際には「核抜き」でもなければ、「本土並み」でもなかった。

今も、狭い沖縄県土の25パーセントが米軍基地関連で取り上げられたままだし、在日米軍基地の75パーセントが狭い沖縄県に集中している。

世界一危険な米軍基地と言われて久しい普天間基地もそのまま。

名護市辺野古への移転では、沖縄における米軍基地の固定化が一層、既成事実化するばかりか、かけがえのない澄んだ沖縄の梅や貴重な海洋生物が損なわれてしまう。

ベストアンドブライテストの名を恣にしたマクナマラ元米国防長官ですら後年、自己批判したベトナム戦争に際して爆撃機の出撃基地だった、広大な面積を占める極東最大規模の米空軍嘉手納飛行場も全くそのまま。

1995年の米兵3人による少女強姦事件や、2004年の米軍ヘリコプターの沖縄国際大学構内への墜落事件、2012年の2人の米兵による女性集団強姦事件、2013年の米軍ヘリコプター墜落事件など、顕在化した事件の他にも、人びとの安全を脅かす事件は沖縄では日常茶飯事だ。

地位協定によって、ほとんど治外法権に近い権利が米軍には与えられている。

未だに米軍の思いのままというのが沖縄の現実と言わざるを得ない。

「日本国の安全保障のために」という大義名分のもと、日本国民の、とりわけ沖縄県民の日常生活の安全が全くなおざりにされている。

国の安全のために、個人の安全が犠牲にされてよいはずはない。

周知の通り、もともと沖縄は近代初頭までは歴とした独立国、琉球王国だった。が、江戸年間、同国に強い影響力をおよぼしていた薩摩藩出身者が長州藩出身者とも

ども政権の中枢を占めた明治新政府によって、有無を言わさず日本に組み入れられしまった。極めて強権的な一連の琉球処分によって、琉球藩とされ、それまでの国王は「藩王」などという屈辱的な称号の存在に格下げされ、さらには廃藩置県で沖縄県にされてしまったのだ。

この間、琉球の庶民の人びとの何らかの意志がそこに反映されることはなかった。こうして、おおらかな海洋文化を有する南の平和な島は大日本帝国の一部になった。

それが、自らの意思とはなんら関係なく、十五年戦争最末期において、日本で唯一の地上戦の舞台とされ、戦闘や集団自決などで県民の六分の一の命が奪われ、その美しい居場所は焦土と化してしまった。

挙句の果てには、日本が無条件降伏をしてから、長い年月を経た今日でも、なお、大切なふるさととは取り上げられたまま、大事な居場所は基地にされたままなのだ。

今も、自分たちの居場所を戦争に直結した場所にされ、日々、身の安全を脅かされているのが沖縄の人たちだ。

沖縄の人たちは、幾重にも、先祖伝来のかけがえのないふるさとを、安心な安全な心休まる居場所を奪われてしまっている。

私の沖縄の友人、知人たちは、「どうして本土の日本人（あるいは、ヤマトンチュ）は、こういう沖縄の苦境を分かってくれないのだろうか。沖縄に基地負担を押し付けっぱなしでいいと思っているのか」と口を揃える。穏やかな彼らの口調が、そういう時だけは一転、舌鋒鋭く迫るような口調になる。

確かに、こうした沖縄の現状を、本土の日本人は我関せず、他人事みたいにしてしまっているところがある。

想像力はこんなときにこそ働かせないと。

自分の家のすぐ隣が高い鉄条網で囲まれた他国軍の基地だったら・・・。

そこで、四六時中、飛行機やヘリコプターのものすごい離着陸時の爆音にさらされ続けていたら・・・。

時に、もろもろの航空機が離着陸に失敗して、近くの民家や小学校や大学に墜落したら・・・。

帰宅を急ぐ自分が、あるいは、自分の母親が、妻が、恋人が、時に、まだ小学生の少女までが、突然、米兵に襲われたら・・・。

・・・・・・。

想像したくもないことばかりだ。

でも、これが沖縄で起きている現実なのだ。

こうした沖縄の現実を見据えず、日米安全保障条約を金科玉条のごとく墨守し、沖縄を米国のなすがままに任せて、沖縄の人びとの安全、日本国民の安全よりも、米国の世界戦略に追随することを優先しているかのような、ヤマトンチュの政治家や官僚が多すぎる。

米国の世界戦略という観点から見ても、冷戦構造の終焉、戦略兵器の性能向上、米海兵隊の展開の仕方の転換等々の変化に鑑みれば、在沖米軍基地の重要性は相対的に低下していることは間違いない。

米国の軍事専門家の間では、米海兵隊の大部隊の沖縄常駐はもはや不要、有事駐留で十分という論も現実味を帯びている。

にもかかわらず、そして戦後七十年もの年月が経過しているにもかかわらず、一日千秋のごとく戦勝国の軍隊が沖縄に、そして日本の各地に占領軍さながらに居座り続けている状態というのは異常なことなのだ。

我われ日本人は、この異常さに慣れっこになってしまったのか、この状態を異常、異様と感じなくなってしまっているきらいなしとしない。この一種の感覚麻痺は怖い。

本来なら愛国主義者、国家主義者たちは、こういう状態に最も敏感に反応し、愛する祖国をこうした屈辱的な状態から一刻も早く解放しようと声を挙げ、現状打開を目指し、真の独立を達成すべく尽力するはずであろう。

ところが、それらを自称する人びとが米国の占領状態からの脱却を訴えているのを聞くことはない。

昨今では、革新の側からもあまり反米、反米軍基地的な言辭は聞かれなくなった。こいした言辭は票には繋がらない、即ち、一般の関心と呼ばないということなのか。

こうした日本の状況を見透かすかのように、重要性は減殺されつつあるにもかかわらず、米軍は～既得権は手放したくないという志向と、居座りだけの心地よさがあるからこそ、沖縄始め日本各地に居座り続ける。

何しろ日常的な居住区までも一等地が確保され、米国内における以上に快適な生活環境が保障されているのであるから。そして、「思いやり予算」等々をもって、日本政府が手厚くその膨大な米軍基地関連経費の多くを肩代わりしているのであるから。

その結果として大切なふるさとを、心休まる居場所を奪われたままの人びとへの償いは、札束を山積みすれば解決できるような問題ではないことが、ヤマトンチュの政権与党の政治家たちには全く分かっていないようだ。

だから、別件に関してだが、〈最後は金目の問題でしょ〉などと当該地域の人びとの気持ちを逆撫するような発言が総裁候補の有力政治家の口から平然と飛び出してく

るのだろう。

基地、原発、その他諸々、危険を伴う不都合な施設を受け入れてくれた地域には、ご褒美として米軍再編交付金、特別交付金、助成金攻勢・・・迷惑料をたんまり払うんだからそれでいいだろう、という魂胆がみえみえなのである。

しかも、それだけでは未だ足りず、平和憲法をないがしろにする、戦争への道を開く集団的自衛権行使容認の閣議決定・・・。

超国家主義的な一内閣の決定で、解釈改憲などというのはあまりにも理不尽。権力の濫用以外の何ものでもない。

日本国憲法、殊にその第9条は、日本を居場所とする日本人にとって至宝なのに。

他国の軍隊などより、第9条のほうがよほど日本の安全を守ってくれる存在なのに。

他国軍の広大堅固な基地などより、第9条のほうがよほど世界平和に対する日本の真摯な姿勢を示す力強い道標なのに。

- ①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- ②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

(『日本国憲法』第2章「戦争の放棄」第9条「戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認」)

他国から日本が武力攻撃されることに対する「抑止力」を言うなら、この日本国憲法第9条の「抑止力」のほうが、他国軍およびその基地の存在による「抑止力」より、よほど世界にアピールするし、頼りにもなる。

「戦争はしない」と、明言している国に宣戦布告をして武力攻撃を仕掛けてくる国は存在しないはずだ。

それを平和ボケとか、無責任な発言とか何とか、言いたい向きには言わせておこう。そもそも永遠平和を希求するためには、底抜けの楽天主義と他者への信頼感が欠かせないのだから。

他国にとって脅威となる強大な在日米軍基地の存在の方向が、よほど他国の日本への攻撃の格好の口実となろう。

日本は、もっと高らかに、平和憲法を掲げて、近隣諸国を始め、他国との間に人的交流、文化交流を拡げて、

日本の安全を確保するような努力をこそすべきだろう。

それこそが、これからの日本の身丈に合った、日本独自の世界平和への貢献の一つの方途だ。

「積極的平和主義」は「消極的軍国主義」と同義語だ。言葉のまやかし。こんなみょうちくりんな言葉は誰も信用しない。

時代遅れの集団的自衛権行使容認の閣議決定は、日本憲政史上の一大汚点と言わざるをえない。

平和憲法こそ、第9条こそ、日本にとって、世界に誇るべき平和戦略の原点であることを忘れてはなるまい。

第9条は、日本を居場所とする我われに安心と安全をもたらしてくれる「お守り」と言っても過言ではない。

国連憲章の基本も「不戦」なのに、集団的自衛権行使容認などと、危なっかしいことを世界中に宣言して得意になってみても、誰も尊敬してくれないし、喜んでくれるわけもない。

米国内の超右派と死の商人たちが、くしめしめ、日本がより一層、右傾化し、一層、米国の世界戦略にとって都合の良い国になった」と内心、ほくそえんでいるくらいなものだろう。

沖縄にとっては、県内の米軍基地負担が軽減されるわけではないし、ヤマトンチュの政治家や官僚たちを信用しないウチナンチュの間で、独立論が澎湃として湧き上がるのも無理ないことだ。

そもそも、沖縄独立論は今に始まったばかりの議論ではない。

そうした真摯な主張に対して、中国の手先の言説とか、売国奴の言説とか、まったく見当はずれな罵声を浴びせて、言論の自由を封殺しようとする愛国主義者を自称する人たちもいる。

本当の「愛国主義者」は、そんな安っぽい生半可なものではない。

心底から自分の国を愛する人、本物の「愛国主義者」は、自国の過去の負の歴史にもきちんと目を向けられる人、過去における加害の過ちは虚心坦懐に反省し、率直に謝罪して、被害を受けた国、人びとと未来に向けて仲良くするために尽力できる人、自らの国を愛するように、他の国をも愛せる人だ。

日本にも、こういう人はいっぱいいる。

しかし他方で、そんな歴史の見方を自虐史観とあざ笑ったり、自分たちは戦争当時にはまだ生まれていなかったのだから、過去の日本がやったことに責任を負う必要は無いとか、自分たちは戦前戦中の日本とは無関係などと、頬かむりを決め込む人たちもいる。

戦後生まれの保守政治家にそういう認識を持つ人たちが結構、多いように思われる。それをウリにして、イキがっている向きもけっこう多いし、そうした政治家が一定限の支持を集めていることも事実だ。

政治家たるものは、国家の現在だけでなく、その過去にも遡って責任を負わなければならないのに、そうした意識をほとんど欠落させたまま、国会議事堂を心地よい居場所と心得て、「議員様然」としてぬくぬくと居ついている人もいる。

そういう意識だから、日本を守るために沖縄に泣いてもらうなどと、考えてしまえるのだろう。

そんな得手勝手な「辺縁切捨て論」的思考は許されるものではない。

だから、以前から根強く存在していた沖縄独立論が再燃し始めたといえよう。

薩摩藩と清国の双方から圧力を受け、両属関係を強いられ勝ちだったとはいえ、元はと言えば独立国家、琉球王国だったのだから、独立を叫ぶ声が挙がっても何もおかしくはない。

スコットランドは、1707年1月に同国議会が、イングランド議会との合意を議決したことにより主権国家としての立場を喪失した。爾来、三百余年、くすぶり続けていた再独立への動きは、ついに2014年9月、スコットランド独立の可否を問う住民投票実施というかたちで結実した。

大英帝国（および、その背後の米国）の必死の巻き返しによって、最終段階で独立は阻止された。けれども、一滴の血も流されず、一発の銃弾も発射されず、合法的、民主的に、独立の一手手前にまで至ったことは、カタルニアやグアムや沖縄にも勇気と希望を与えた。

スコットランドやカタルニアの動きは偏狭なナショナリズムとは一線を画すべき、機会均等、平等平和、民族自決を求める自然な動きといえよう。

スコットランド独立を問う投票が注目を集めている時、語り合った沖縄の友人は呟いた。「日本政府に、沖縄県が独立の可否を問う拘束力のある住民投票を行うことを認める度量があるだろうか・・・」。

長年に渡る日本における沖縄差別に辟易として、独立すれば、独立国としての沖縄国あるいは琉球共和国が、主体的に米国と折衝して、より良い沖縄を築く可能性が開けるかもしれない、と考える人たちもいるのだ。

別の沖縄の友人は、むしろいつそのこと米国に編入されたら、米国当局も米国市民となった沖縄人に対して、不当にその市民権を抑圧するようなことはできなくなり、

かえって沖縄ばかりにこんな酷い基地押し付けを継続することは出来なくなるはずという論法で、ハワイのように米国の一つの州になることを夢想(?)する。

彼の論拠の一つは、沖縄戦に際して、どちらの仕打ちの方がより酷かったかという点、敵のはずの米軍よりも、友軍のはずの日本軍だったという彼の祖父母の話である。日本軍は沖縄の人びとの大事な居場所をめちゃくちゃにしたけれども、米軍は時にこれに敬意を表してくれた・・・という話が骨子だ。

民族自決からは遠ざかる思考ではあるけれども、既存の「国家」の枠に縛られず、よりよい自分たちの居場所を確保しようという柔軟な自在な思考という見方もできよう。

学生時代、街頭に繰り出しては「民族の怒りに燃ゆる島、沖縄よ・・・沖縄を返せ、沖縄を返せ・・・」と歌いながらデモ行進していた私は、遅まきながらヤマトンチュ、本土人としての立場からのみ沖縄を見ていた過去を自己批判せざるをえなかった。

沖縄を居場所とする人びとの本当の苦難など、全く理解できていなかったのだ。戦時中、日本軍が沖縄でどれだけ現地の人びとに犠牲を強いていたのかといったことに関しても、後年、移民研究で沖縄に足を運ぶようになり、その関係で友人になった人たちから教えてもらうまでは全く浅薄な理解しか出来ていなかったのだった。

米国における移民研究では、日本本土各地からの移民を「ジャパニーズ」と称し、沖縄からの移民を「オキナワン」と称して、別個にその特徴や歴史的由来を捉えようとしている研究者も少なくない。

両者を別個の存在として切り離して考えようというような政治的意図がそこには介在しているのではないかとまでいうのは穿った見方に過ぎるかもしれない。しかし、意図的にそうした呼称を用いているのかもしれないとも考えられなくはないではないか。

沖縄の人たちも、自分たちのことを「ウチナンチュ」と称するのに対して、日本本土の人たちのことは「ヤマトンチュ」と言う。

この大きな距離感に関して、本土の日本人は無関心に過ぎると言えるかもしれない。

本土の中央の安全快適な居場所に居座る政治家や官僚たちは、危ない沖縄の現実に相変わずきちんとした目を向けようとしないままなのだ。

東京を中心として、日本全体を眺めると、南方の沖縄

は辺縁の地ということになる。

しかし、東アジアのなかで、沖縄や東京を見てみると、沖縄は中心に位置する枢要な場所だし、東京はそれこそ極東の辺縁の地に過ぎないことが一目瞭然である。

東アジアそして太平洋全体を見渡すとき、その地政学的重要性がどちらにあるかといえば、沖縄に軍配が上がることは間違いないところだ。

だからこそ、米国は、その世界戦略上の価値の低下を認識しながらも、なお沖縄を手放そうとはしないのだ。

〈沖縄に基地があるのではなく、沖縄はそもそも基地の島〉などと平然と言っているのける米国人もいる。そんな不遜な他国人のために沖縄が犠牲になるなんて、これ以上の不条理はあるまい。

けれども日本には、いまだに「米国は、日本の安全を守ってくれているのだから、それくらいの犠牲を払うのは当然」などとのたまう米国政府の傀儡かと思まごうような政治家や官僚たちが少なくない。

だから、米国は日本をほとんど属国扱い、沖縄を植民地扱いだし、未だに日本国は真の独立国家たりえていないのだ。

沖縄の人たちは、美しいふるさとを、世界一美しい海に囲まれた自分たちのかけがえのない居場所を、世界一危険な米軍普天間基地や広大な嘉手納基地に掠め取られたまま、その危険さわまりない隣接地を日常的生活の場にされたまま放置され続けている。

福島の前第一原発周辺市町村の人たちも、そう。

いまだに十五万人の人たちが、安住の地であるはずの故郷に帰れず、心地よい居場所を失ったままだ。

こうした「辺縁切捨て論」に基づく居場所の喪失は耐え難いことであり、そうした事態を放置しておくことは人倫に反するということを、みんなの意識のなかに共有していかないと事態は改善されえない。

8. かけがえのない地球をみんなの居場所に

母の胎内という至高の居場所から出ることを余儀なくされて、この世の人となって以降、生まれ出づる悩みを抱えながら、いろんな居場所と出会いながら、人は生きている。

だから、人生の時どきにおいて多彩ないろいろな居場所と出会える人は幸いといえよう。

さまざまな居場所があれば、幅広い交友、交流もできし、自らの思考の幅も広がる。

個々それぞれの人びとが、人生の時どきにおいて、それぞれなりに、ゆっくりゆったり、悠然と、愉快に、優雅に、有意義に【これぞ私の唱える「4ゆ」(または「4Y」)】過ごせる、あれこれと多様な居場所を見いだせたら、どんなにか、個々の人びとの人生は充実し、楽しくなることだろう。

そうしたなら、それらの居場所は、常に拡大再生産、自己増殖を通して人びとに大量消費を強い、逆に貧困をも生む市場経済、産業社会の論理に歯止めをかける拠点、地球をこれ以上、汚すことなく、第三世界の貧困、格差の問題にも冷静な目を向け、公正・平等な地球を創造するための拠点、あらゆる国における邪悪な政権の邪悪な政策に対する抵抗の拠点、戦争のない平和な世界を希求する拠点になりうるであろう。

そして、それぞれが地球上のいずれかの場所で、自らの心地よい居場所を確保できたならば、それは、そうした居場所の総体としての地球への愛慕の情に繋がり、地球上のみんなが、地球こそ、かけがえのない我われ、私たち、僕たちの居場所と思えるようになるに違いない。

地球の大半は生命の源泉である海、そして海は個々の生命の源泉である母の胎内から連なっている私たちの大事な居場所なのだから。

注

(1) 厳密に「居場所」という言葉を規定して、その語に関して学問的な観点から考察するという作業はまだ未開拓な分野といえよう。そうしたなかで、『「居場所」概念の検討』(中島・廣出・小長井、2007年、『三重大学教育学部研究紀要』第58巻[社会科学]、PP.77-97)では、比較的、詳細な検討がなされている。ただ、同論では、「子どもの居場所がない」ことに発する諸問題への関心が中心であるため、必ずしも本稿の視座と同一線上にある論とは言い切れない。したがって、ここで同論に関して詳細な批判的検討をすることは避け、それは後日、起稿する予定の「居場所論：先行業績篇」に回すこととする。

(2) もう少し詳らかに言うなら、私の専攻する分野である歴史学、人類学といった方面では、意外なくらいに「居場所」に焦点を当てた業績を探し出すことは難しいということである。心理学、教育学などの分野においては、けっして数多くはないが「ひきこもり」「不登校」等といった社会問題との絡み合わせのなかで「居場所」を論じた業績は散見されることには、念のために触れておかなければなるまい。そして、それらに関しても必要最小限の範囲で、注(1)同様、続稿「居場所論：先行業績篇」のなかで取り上げるつもりである。

＊引用・参考文献

- ・天沼香『故国を忘れず新天地を拓く～移民から見る近現代日本～』、2008年、新潮社。
- ・天沼香「拝啓 鳩山由紀夫総理大臣殿」（岐阜新聞、2010年）。
- ・天沼香「世界の中の日系人」（岐阜新聞、2008年3月23日）。
- ・天沼香『日本人と国際化』、1989年、吉川弘文館。
- ・天沼香『父と子のフィールド・ノート～歴史人類学的考察～』、2000年、東京堂出版。
- ・天沼香『日本人はなぜ頑張るのか～その歴史・民族性・人間関係～』、2004年、第三書館。
- ・天沼香未刊「聞き書き」フィールドノート（沖縄、ギリビア、ペルー、カナダ、ハワイ、米国本土等）、他。